



インドにおける 動物の保護

八 木 健 三

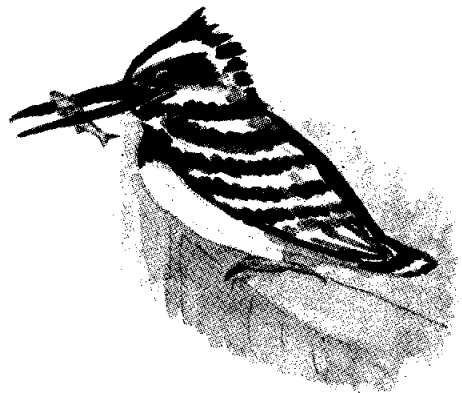
○……………
はじめに

一九八一年一月、私はインドのルールキー大学の客員教授に招かれた。これはデリーの北一八〇キロはなれたルールキー市にあり、一三〇余年の歴史をもつ古い大学である。かつてピッツバーグ大学の客員教授時代の教え子のグプタ博士がこの大学の講師になり、「実験岩石学の実験室を創設するので、ご援助いただきたい」ということで出かけた。ルールキー大学で実験岩石学の講義を行った後、各地の大学や研究所でも講演を行った。この間前後三カ月、インド各地で見聞したことをもとに、インドにおける自然保護、とくに動物の保護の現状について報告したい。

○……………
生物への限らない愛

デリーからルールキーへは車で行ったが、都市や村落に入ると道路は人びとであふれ、これに交ってコブ牛も悠然と歩いている。荷物を背負ったラクダや、ときには象さえも…。「こんな所を車で進めるのか」と思うほどの混雑の中を、車は低くクラクションを鳴らしながら人波をかきわけ、かきわけ進む。悠然とした牛はむろん、人びとも決して慌てて避けたり、走ったりしない。が、車はやがて人混みを見事に通り抜ける。「なるほど、まさに『混沌の中の調和』だな」とまず最初のカルチャーショックを受けた。

私達が宿泊したのは大学内の「アフリカアジア会館」



魚をくわえたヤマセミ

で、多数の留学生や客員教授が滞在した。ここでまず驚いたのは、スズメが食堂の窓から飛びこんで人を恐

れる気配もなくパンくずをついばんでいることだった。庭にはカラスが来て盛んに餌をあさる。このカラスは頭と翼は黒いが全体は灰色でやや小型。大きく真黒なジャングルガラスに対してハウスカラスと呼ばれるが、恐れ気もなく溝の中まで頭をつっこんで餌をついばむ。翼を揺げると白い斑紋の目立つムクドリも常連だ。

とにかく、どの鳥もまことに鷹揚で、いっこうに人を恐れる気配がない。人影を見ると、すぐ飛び立つ日本の鳥たちに比べると、たいへんな相違だ。「なぜだろうか」と不思議に思った私は、まわりを注意して見た。腕白な子供たちの集まっている所でも、虫や蝶をつかまえたり、犬や猫をいじめる光景はついで見られなかった。無益な殺生は一切やっていないのだ。

あるとき、私は学生たちに訊いてみた。

「君たちは蚊に喰われても殺さないの?」

一人が笑いながら、

「いや、そうでもないけれど……でもアリなんか踏み殺したときは、神さまの所にいつてあやまる人もいるんだよ」と答えてくれた。

インドの人口の八割以上を占めるヒンドウ教は「人間も自然の一部分として共存しており、生物は全て生存権をもっている」ことを教え、人びとはその教義に忠実にしたがっているのだ。生きとし生けるものに対する限りない愛、それがおのずと、小鳥たちのふるまいに現われているのだ。インドにおける自然保護は、正にこの視点から見据えなければならぬ。

○……………

たのしいバード・ウォッチング

ルールキー大学に行つて間もなく、ナレーン副学長の招宴があつた(インドの州立大学は、いずれも知事が学長を兼ねているので、副学長が事実上の学長である)。沢山の鳥を描いたスケッチブックを見た副学長は、「いい方をご紹介しよう」と引合わせてくれたのが、中央建築研究所長のモハン博士であつた(なおモハン博士はその後、カシミール地方の大学の副学長になつたが)。

さつそくつぎの日曜日の早朝、モハンさんが会長をしている野鳥の会の会員一同と、大学附近の探鳥会に参加した。大学のキャンパスのはずれから、陸軍基地のまわりの原を廻る二時間ほどのコースで見たのは三〇種をこえた。

スズメ、ムクドリ、セキレイ、モズ、メジロ、トビ、ハトなどは、どれも日本のそれとよく似ているが、美

しい紫色のハチドリ、長い尾のドロング(鳥の一種)、赤い嘴、白い胸に青い背のカワセミ、いつも五、六羽が群れているので、「七人姉妹」と呼ばれるバブラー、魚を銜えたヤマセミなど、初めてお目にかかる鳥も多く、それが肉眼でよく見えるのだから実に嬉しくなつてしまふ。これに味をしめ、それから暇のある度にバード・ウォッチングに出かけ、スケッチブックには沢山の野鳥の画がたまつた。

キャンパスを歩くと、ムクドリ、バブラーなどの常連のほかに、ヤツガシラが地面をつつきながら虫を食べている姿もよく見かけた。きれいにねていた冠毛を逆立たせ、白黒の模様のはつきりした翼を拡げて飛ぶ姿が美事だつた。緑の体に赤い嘴のグリーン・パーベツトは「クックツ」とよく透る声で啼いていたが、それはカジヤドリの名のように遠くで聞いてみると、「カンカン」と美しく林間にこだました。

ある日、ルールキーの町はずれを歩いていた私は、おどろくべき光景に遭遇した。まわりの木々の枝という枝には、白いエリマキのような羽毛につつまれた肩をいからせたハゲタカ(ベンガル・ハゲタカ)が止まっている。その数は僅に百羽を超えている。すべてのハゲタカの視線の先を追うと、路傍の草原で数人の男が大きな牛を解体しているところだつた。一面に真赤な血があふれていた。

いまにも襲いかからんばかりの姿勢をとりながら、飛び立たないのは、見かけほどには悍猛でない習性のせいだろう。だが、人びとがすっかり肉を取り去つたあとには、あのハゲタカの群は血の海に残された骨に

殺到したことだろう。

その後ネパールを訪れたとき、カトマンズの郊外の屠殺場でも、無数のハゲタカが解体された牛などの骨に群がっているのが目撃された。

三月になつて、私達はデリーの西方ラジャスタン州に地質調査に出かけた。この州は鳥の種類の多いことで有名である。田舎の小学校の校庭にキャンピングを張り毎日周囲の山地の調査を行ったが、朝になるとクジャクが校庭に現われるのを見るのが楽しみだつた。雌の方は小高い木の枝にも飛び上つたりしたが、雄はいつも美しい尾を引っぱりながら胸をさらせて校庭を歩いていた。クジャクはインドの国鳥として、手厚く保護され、捕獲したりすると、五〇〇ルピー(約一万五千円位、副学長の月給が三千ルピー)という大金か六カ月の懲役が課せられるという。

この調査の間に、キツシャングー旧王宮の近くの沼で数羽のツルを見ることができた。タンチョウに似ているが、頭は白くて頬が赤く、体全体がやや灰色かかり、翼の先が黒い。セーラス・クレーンとよばれている。周囲の畑では牛をつかつて農民達が耕作していたが、ツルは一向に平気で魚をあさつていた。しかし私が近づいてスケッチを始めると、ゆつくりとはあるが次第に遠くの方に移動してゆくのが面白かつた。

この野外調査の間には、タカやワシの美事な飛翔もしばしば見かけたが、その種類は不明だつた。ジヨドプールの動物園では、絶滅が心配されているインドマガン番の番を見た。ちょうど発情期だつたのか、雄が胸毛と腹毛を逆立たせ、風船のようにふくらんで求愛

しているのが滑稽だった。

○……………

サリム・アリと「インドの鳥の本」

ところで、インドのバード・ウォッチャー達の聖書ともいべきのがサリム・アリ著「インドの鳥の本」である。ボンベイ博物学協会のアリ博士は長年インドの鳥類について研究してきた鳥類学の第一人者で多数の著書があるが、中でも最も有名なのがこの「インドの鳥の本」。一九四一年の初版以来一七版を重ね、すでに五万冊に及ぶベストセラーで、探鳥会に参加する人はよくこの本を携帯していた。私もモハン博士からいただいた一九六一年出版の第六版を愛用したが、これには二五六種の鳥の原色図と適切な説明が与えられ、野外で見た鳥の同定にはたいへん便利である。この手引き書がインドのバード・ウォッチングに貢献したところはいへん大きく、かつて獄中にあつたネルーがインディラ嬢（現ガンジー首相）に誕生日のプレゼントとして贈つたというエピソードもある。

あるジャーナリストが「野外生物の勉強を学校のカリキュラムに組み入れてはどうか」と質問したのに対し、アリ博士が「これは算術や代数のように教えられるものではなく、ハシカなどの病気のように罹るものなんだよ」と答えているのは面白い。

当時（一九八一年）すでに八五才で矍鑠としていたが、おそらく、現在も元気に自然保護に、研究に活動をつづけているであろう。

ところでインドでもバード・ウォッチングが盛んなな

ったのはいいが、熱心のあまり鳥や巣に近づきすぎ、雛の養育活動を邪魔する人びとも増えてきたため「バード・ウォッチャーこそ鳥たちの最大の敵だ」といわれるようになったのはまことに皮肉で、わが国の事情にも通ずるものがある。

○……………

自然保護団体の活動

インドにはいくつかの自然保護関係の団体があり、また世界野生生物基金のインド支部も活発な活動をつづけている。ルールキーの北にある小都会アラドンはこの地方の中心として、いくつかの団体や支部がおかれ、附近にはサンクチュアリも多い。またその活動が児童たちに焦点をあてているのも大いに参考になる。WWF支部主催の「野生生物の児童画展覧会」が建築研究所講堂で開催されたとき、招待をうけた。小学一年生から高学年生まで思い思いの画を描いていたが、「鹿を襲う虎」「荷物を運ぶ象」など、いかにもインドらしい画が多く、見ていてたのしいものであった。それぞれ優れた作品には一等賞、二等賞が贈られ、さらに全参加児童にはクレヨンや水彩などの賞品が贈られ喜ばれた。

この席上、私は日本の動物の話を所望されたので、タンチョウやハクチョウ、トキ、カモシカなどについてスライドの代りにオーバーヘッド・プロジェクターで画を描きながら話したところ、たいへん関心を集めた。ところで「なぜ、日本の鳥たちは人を怖れているのですか？」という質問があつたので、「日本では昔、



WWFルールキー支部主催の児童画展覧会と支部役員の女性

児童画の入賞作品



ジャイプールの町角のコブラ
蛇使い

カスミ網をつかって鳥を捕え、ヤキトリにして食べたことがあるのです」と答えた。子供達はびっくりし、大人達は声をあげて笑い出し、情けない思いをした。八五〇〇種にのぼる鳥のうち、約二〇〇〇種がインドに生息するが、かなりの種類は絶滅の危機に瀕し、種々の保護の方策が試みられている。そのうちもっとも主な方法はサンクチュアリの設定で、最大のものはラジャスタン州のバートプール・サンクチュアリである。これは、かつて王侯の狩猟地であったところをサンクチュアリにしたもので、いまではバード・ウォッチャーのメッカとなっている。そのほかにランガンナット、ベダナンガル、チルカ湖、ランオアクッチなどのサンクチュアリが知られている。

バートプールには淡水湖があり、数千のコウノトリ、アオサギ、ヘラサギ、シロサギ、ウ、トキなどの営巣地が多い。これに対しオリサ州のチルカ湖は鹹水湖でカモが多く、グジャラト州のランオアクッチの広い平原は、フラミンゴのインドにおける唯一の繁殖地とし

て知られている。

このように湿原や水鳥の保護にはたいへん熱心であるが、インドは一九八〇年の時点でラムサール条約には加盟していない。鳥の足輪標識は一九二六年にボンベイ博物学協会のアリ博士らによって始められ、現在までに二五万羽以上の鳥に標識をつけて放した。現在盛んに行っているのはバートプールと東海岸のポイントカルメールの二つのサンクチュアリで、農林省により毎年二、三万羽の鳥に標識をつけ、水鳥と湿地の管理に多くのデータを提供している。

○……………

プロジェクト・タイガー

さて、つぎに野獣の保護に目をむけよう。インドといえはまず虎が考えられる。二十世紀初頭にはインド虎は約四万頭と推定されていたのが、一九七〇年にはわずか二千頭に激減した。この減少はインド内外の自然保護論者に大きな衝撃を与え、一九七〇年には虎の狩猟禁止が定められた。さらに一九七三年にはインド政府は世界野生生物基金の協力を得て、虎の保護ならびにその住居と餌食の保全を目的とした、「プロジェクト・タイガー」を発足させた。その実施にあたっては虎保護区はもちろん、これに関連した地域全体の保全を目標としている。現在設定された十一の保護区について確認された数は表・1のごとくで、インド虎の生き延びる見通しがたてられた。

ラジャスタン州での地質調査に同行したルーキー・大学院生の話では「兄がこの計画に従事し、虎の増殖

表1 保護区における虎の生存数

マナス (アッサム州)	105頭
バラモウ (ビハール州)	32頭
シムリバル (オリッサ州)	64頭
コルベット (ウッター・プラデッシュ州)	79頭
ランタンポール (ラジャスタン州)	25頭
カーナ (マディヤ・プラデッシュ州)	62頭
メルガート (マハラシュトラ州)	60頭
バンダイプール (カルナタカ州)	36頭
スンダーバーン (西ベンガル州)	181頭
ベリヤール (ケララ州)	34頭
サリスカ (ラジャスタン州)	最近の数 は人手不 可能

に貢献したので農林省から表彰された」ということだった。

「虎の棲むジャングルは危険というけれど、都会の道路を歩く方がはるかに恐ろしい。カルカッタの交通事故死の方が、虎の犠牲者よりずっと多い」といった文にお目にかかるのも、さすが虎の住むお国柄だけのことがある。

虎といえば、恐ろしい人喰い豹の話はいまだに有名である。二月末デラドゥン東方のヒマラヤ低山帯の地質巡検の間に、ガンジス河の上流ルドラブラヤグで変った記念碑を見た。これは一九一八、二六年の八年間に同地域の住民三〇〇余人を殺した人喰い豹がイギリス

から派遣された銃の名手ジム・コルベットにより、一九二六年五月一日午後一〇時、ついにこの地で射殺されたことを記念した碑であった。なお、一九七九年にもこの地方で三〇人の住民を喰った豹が捕獲されたという。

このような人喰豹の跳梁とは逆に、絶滅の危機にさらされているのが、インド象である。象牙は一キロ千ルビー（三万円位）で取引され、大きな雄になると六〇キロもある牙をもつので、密猟が監視の目をかすめて行われ、その生息地であるケララ、カルナタカ、タミールナズなどの南部諸州から絶滅が憂慮されている。

これに対し、これらの諸州では、象牙細工を民間から政府直営にすること、農民の銃砲所持を禁止することなどが論議され、また国際自然保護連合のアジア象グループはバンガロアで委員会を開き、密猟への対策を論じ、合成象牙による細工の提唱などを行っている。これらの対策が実効をあげることを望みたい。

このほかによく見かけるのが猿である。ルールキー



尾長猿

から三〇キロくらいの所にあるハルドワールの聖地を訪れたとき、ガンジス河の支流にかかった橋の上に、大きな尾長猿があらわれたのにびっくりした。顔と手足だけが黒く、身全体は長い灰色の毛におおわれ、長い尾をもっている。まわりの群集に驚くこともなく悠然と橋げたに腰をすえたり、路を歩きまわる。日本なら早速大捕物騒ぎになるところだが、別に人びとも驚かず、やがて猿は森の中に姿を消した。その他の地域でもニホンザルに似て顔の赤いサルを見かけることが多かった。いずれもサンクチュアリになっていて、仔猿をつれた親猿が悠然と遊んでいた。

○……………

あとがき

国際自然保護連合等の組織により提唱された「世界環境保全戦略」が一九八〇年デリーで発足するにあたって、ガンジー首相はつぎのように演説している。

「環境保全に対するわれわれの関心は決して情緒的なものではなく、古いサガ（神話）によく知られているつぎの真理の再発見によるのだ。すなわち、インドの伝統は生命のすべての形態——人間と動物と植物——は緊密に関連し合っており、そのいずれか一つの変動は、必ずや他における不安定を生ずることを教えている…」。すなわちインドの自然保護の精神と運動は、その根底においてヒンドウ教の教義と、それに由来するインド人民の精神構造とに深くかかわっているのである。これが今後どのような発展の経緯をたどってゆくか、およそ対照的な立場にある日本の自然保護運動

にとっても興味深いところであろう。

(協会会長)